

伊平屋村の先史遺蹟

高 宮 広 衛

はじめに

本村は奄美、琉球両先史文化の交渉関係を考える上で与論や沖之永良部等と同じく従来かなり注目されながらも中央より遠くはなれた離島とあつてか、これまで考古学上の調査はきわめて少く、ごく最近まで先史遺蹟の有無についてさえ何ら知られていなかった。

筆者は1960年夏の本村調査において、伊平屋、野甫両島に数箇所先史遺蹟を知ることができたが、一泊二日という時間の制約があつて充分踏査することができなかつた。従つて今回も1960年度に引続き主として遺蹟の分布調査に力を注ぐことにした。

今度の予定はまづ先年発見の遺蹟につき、当時確め得なかつた遺蹟地の範囲や遺物包含層の有無等を簡単に調べ、できれば若干の遺蹟で試掘を行い残余の時間を末踏査地域の調査にあてるつもりであつたが、今回も諸種の都合で満足な調査を行不得、また末踏査地域を大部残してしまつた。これについては近い将来再び探訪を試みたいと考えている。

本稿では上記兩年の調査によつて得た資料を伊平屋・野甫両島別個にまとめて紹介し、資料の許す範囲において本村諸遺蹟の編年上の序列を考察してみたい。尚、旧石器文化は今のところ未発見である。従つて、本村最古の文化は新石器時代の貝塚文化である。

A 伊平屋島

本島の先史遺蹟は島の東海岸に分布し、西海岸では発見できない。それは西海岸においては山岳が急峻で平地に乏しく生活に不適であるという自然環境によるものであろう。現在の集落が東海岸(略図、表紙裏)に点在するのも蓋し同じ理由によるものであろう。本島で現在知られている遺蹟地は次の四カ

- | | | |
|---|-------|---------|
| 1 | 久里原 | (先史貝塚) |
| 2 | 石蔵川 | (" ") |
| 3 | 東ガジナ原 | (" ") |
| 4 | 上里 | (原史遺蹟) |

所で、上里を除く他はすべて海岸砂丘地に形成されている。今回は久里原貝塚においてのみ試掘を行つたが、これにより本村の先史文化の上限を把握することができたと思う。

I 久里原貝塚

前泊部落後方(北方)に広がる畑地や原野を土地の人は久里原と呼んでいる。この地域は海岸砂丘後端部が古生層の山麓に接する部分で、遺物はかなり広範囲にわたつて分布しているが、古生層部には及んでなく砂丘地に限定されているようである。土器でみると遺蹟の東部と西部とでは様相を異にする。前泊部落より田名に通ずる村道が分布の凡その境界で、道路以東では主として前・中期の土器片が、同西方では後期の土器片が得られる(第一図)。

道路西方で採集した遺物は図版 XVB 5-13に示した焼成のいい9個の土器片である。同図版 11.12.13の三個は底部破片で、11.13は後期の典型的なタイプである。12は前記二例に比べると石英碎片が多量混入され、焼成も悪く脆弱で外面には縦方向の粗い擦痕があり、中期末葉あたりの産物と思われる。7は口縁破片で頸部近く水平方向の擦痕が施されている。他はいずれも器壁の薄い(5-6号)胴部破片で擦痕はなく、茶褐色の色調を帯びた焼成のいい破片である。9は水平方向の凸帯を圍繞する。

この種の土器は前記道路以西、現農業組合の敷地あたりまで散布しているが、量的には貧弱で採集は困難であつた。調査当時、農業組合後方約三十米の畑地に一箇所採砂地があつて、その地層断面を窺つたが遺物包含層は見受けられなかつた。

本貝塚での試掘は、地表採集によつてかなり遺物を得ることのできた道路以東の地(第1図)で行つた。村道に隣接する畑地が本貝塚の中心部と思われたので、そこに6×5呎のピットを設け、三吋レベルで掘下げた。層序は第2図に見られるように最上層-淡黒包の混土砂層(狭間隔の斜線で図示した上部約一呎は耕作による攪乱部):第二層-暗褐色の混土砂層:第三層-黄褐色砂層:

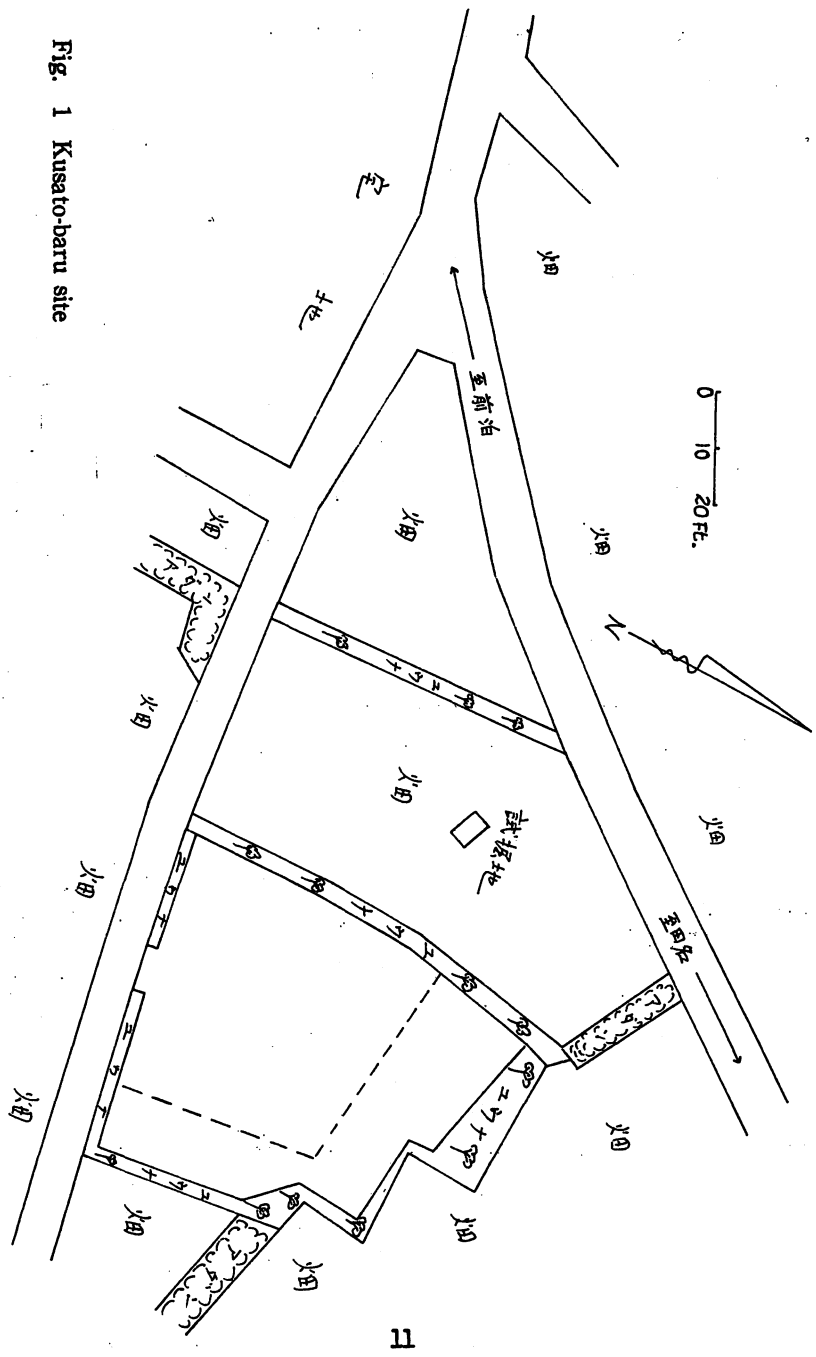


Fig. 1 Kusato-baru site

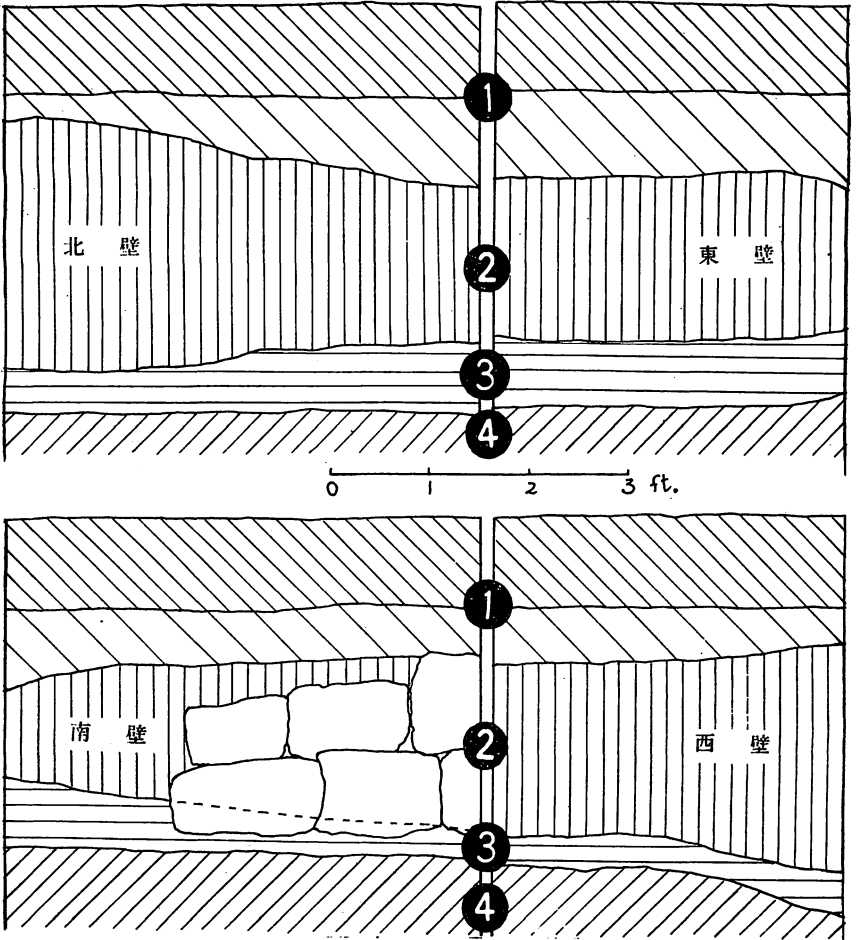


Fig. 2 ① Black Sand (Top part disturbed by cultivation)

② Dark-brown sand ③ Yellowish sand

④ White sand

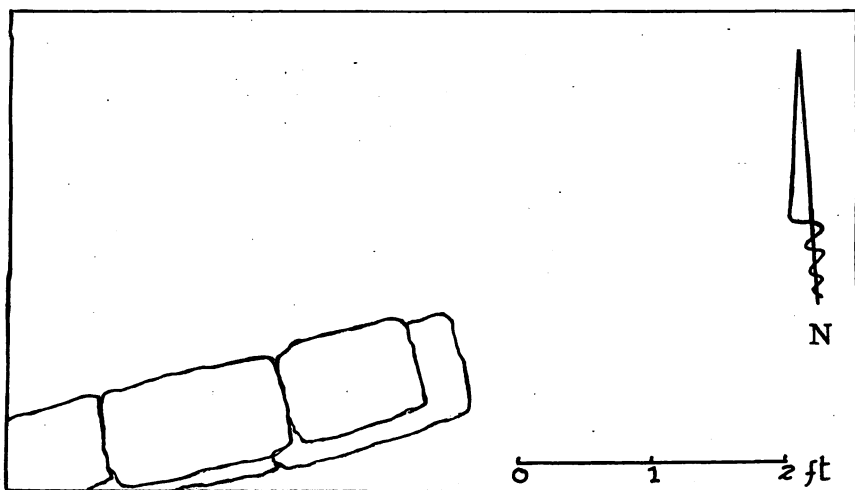


Fig. 3 Piled stones in the test pit

第四一白色砂層の四層を数えるが、耕作による攪乱部（畑地にするため多量の礫を摘出したという）を除けば包含層の最下部までかなりの自然礫の混入があり、奄美大島の宇宿貝塚第二トレンチ第6—7層の状況に酷似①したところがある。本貝塚では層位と土器形式の明確な相関々係を認めるには至らなかつたが、土器の推移の傾向を掴むことは可能である。以下試掘及び地表採集によつて得た資料について記述したい。

貝器 図版 XIII B 3 に示した径11耗のビード一例で、殻頂部に径5耗の孔を穿ち外面をかなり研磨している。従つて種を判別するには至らないが、小型イモガイの一種であろう。第二層下部の出土である。

石器 すべて地表採集によつて得たもので、磨石二個（図版 X II A）と石斧（図版 XI e~h 及び第10図）六個の計八個である。図版 XI e は試掘地東方の東江氏宅地内で得たもので、自然礫に刃を付しただけの簡単な石斧である g は刃部を欠く半磨製石斧、f 及び h は両刃である。磨石 1 は完形品、2 は平坦部の一面が大きく欠損している。e を除きすべて畑地周縁の生垣内での採集で、そこには耕作時に検出された自然礫が相当量集積されており、これを綿密に調べればかなりの石器が発見できるのではないかと思う。

土器 今回の採集品には完形品はなく、復元可能の破片も得られなかつた。従つて採集物はすべて破片だけである。器形はかめ形と壺形の二種に分類できるが、鉢らしき口縁破片が一個試掘によつて検出された。第八図 5（

図版 XIV B6) に示した小破片で、口縁部上方に小孔があり、著しく内湾した形状は鉢状を呈するが、この時期では鉢型土器の報告はないので、あるいは口縁部の単なる変化を示すものかとも考えられるのである。この土器の胎土には細砂や石英片が多量混入されてはいるが焼成は至つていい。この破片は口縁部が直線状を呈するため口径の推算は困難だが、本貝塚の他の土器口縁からみて20種前後かと思われる。この一例を除けば他は甕形か壺形に属する。

壺形土器の出土は僅少で第八図1~4(図版 XIV B1~4) に示した4個だけであるが、細分すれば三種に分つことができる。同図1は口径推算12種、頸部に後述の甕形第三類土器に見られる文様を施文する赤褐色の土器で、胎土には石英片が多量混入されてはいるが焼成は良好である。22"~25" (第三層上部) での発見で壺形土器では最下層の出土である。2は口径4.5種前後、赤褐色の器色を有し、外面には擦痕が見られる。第一層上部での発見であるから、

	表面	表土	0-3	3-7	7-10	10-13	13-16	16-19	19-22	22-25	25-35	計
第一類土器	12	4	2	3	6	7	2	9	7	10	9	71
第二類土器			2		3				1			6
第三類土器	3	2	2	2	6	4	4	4	7	5	1	40
第四類土器	1	1	0	1	0	0	1	0	1	3	1	9
第五類土器	5	6	5	5	1	4	3	4	3	3	0	39
第六類土器			4	2	2	5	4	2			5	24
総計	21	13	15	13	18	20	14	19	19	21	16	189

Table 1. Numbers and Types of kame vessels
of kusato-baru (Depths=Inch)

この種土器では最上層の出土である。他の2個(3~4)は口縁部を山形突起で修飾する例で、この種の出土例は極めて不顕著であるが、嘉手納貝塚②や兼城貝塚③で僅かながら知られている。両標品とも赤褐色の焼成のいい破片である。4は13''-16'' (第二層上部)、3は19''~22''(第二層)の出土。

甕形土器についてはこれを六類に大別し、更にその特徴によつて21種に細分した。細分された種の中には既に型式の設定されているものもあるが、類型中におけるその位置を明確にするため独立して取扱うことを差控えた。採集

破片は琉球の貝塚土器のうち前・中期を代表する型式が大部分を占める。

第一類土器 第四図(図版 X II B)にまとめた土器群で、先端が二叉をなす工具によつて施文され、口縁部に幾組かの山形突起を有する平底の甕形土器である。工具の特徴によつて二線が一組に表現される。文様は基本的には三種に分たれる。即ち1)列点状に施文されたもの(図3,7,) 2)一組前後の沈線(仮に短線とよぶ。本貝塚での出土例はないが、9の上部文様はこれに当る)、及び3) 2-3種以上の沈線(長線と仮称)の三つである。この基本形にジグザクの鋸歯文が組合わされて計六種の文様が得られる。ジグザグ文は前記基本文様の中間部に挿入される場合、同文様下方に施文される場合、及び中間部と下部に同時に施文される場合など種々ある。第四図 4.6.9 が鋸歯文と組合された例である。その他上記工具の代りに単筥で以て同種文様効果を表出するものがあるが(第七種)、この種文様は本貝塚では得られなかつた。以上の他、無文のもので器形上これに属する土器片を第八種とした。本類土器の出土状況は第1表の通りであるが、各種の特徴を略述すれば下記の通りである。

第一種	列点文のみ
第二種	列点文+鋸歯文
第三種	短線のみ
第四種	短線+鋸歯文
第五種	長線のみ
第六種	長線+鋸歯文
第七種	半截竹管状工具によるもの
第八種	無文

尚、先端が三叉をなす工具によつて横捺された文様(同図10)がある。上記の定義からすれば当然別の類型を設置すべきであるがこの種の文様は極めて稀で偶発的であるから、本稿では一応第一類土器の変異型としてここにまとめておく。

口縁の山形突起部外面が更に瘤状突起で修飾される場合がある。結果としてこの部分は胴部より厚く、外側へ突出している。本貝塚では地表採集によつて1個(同図6、図版 X II B⁹) 得ただけで、試掘による発見はない。この一例を除けば他は1.2.7.8.10に見られるように山形突起部断面は胴部と同じく扁平である。

第二類土器 これは形態上第一類土器と第三類土器の中間的特徴を

有する土器群で、これまでの出土例で見ると三種に分つことができる(第五図)。即ち1)第一類土器の器形に第三類土器の文様形式を採用したもの(1.2.3.4)、2)第三類土器々形に第一類土器の文様を施文したもの(本貝塚に出土なし)、及び3)施文工具も器形も基本的には第三類土器に属するが、文様中あるいは文様下部に鋸歯文(同図5)を加えたものである。これに属する破片は6個である。

第三類土器は平口縁、平底の甕形土器で、第六図に代表的な文様をまとめた。本貝塚出土の文様は次の五種である。

- A 幅広い(5耗前後)刻文を基本とし(図の2.4)、それに細線を加えたもの(3)、太い横線と組合せたもの(1)、及び基本文様が連結されたもの(6)に分つことができる。
- B 太い横線を主体とするもの(7、8)でそれに刺突文が施されたもの(9)、細線を鋭く陰刻したもの。
- C 三角状の尖端をもつ工具によつて刺突を施したもの(13)、細斜線を加えたもの(14)がある。
- D 爪形文(15)
- E 細線を陰刻したもの(11.16)

以上五種の他、17の如く一形体として取扱うことのできない気粉れな文様を施文するのが一例だけある。上記A.B.Cは琉球ではかなり広く分布し、出土量も豊富である。Cもよく見受けられる文様であるが量的には不顕著である。Eは奄美諸島によく見る形式であるが、琉球における出土状況はCに類似するようである。

第四類土器 第五図6-13にまとめた凸帯を主文様とする土器である。今これを細分すればA)凸帯のみを付したもの(8)、B)凸帯部にみに施文するもの(9.10.13)、及びC)凸帯部及び同上部に文様を施したもの(11.12)に分つことができる。7は稜線を縦方向に貼付したもので、この種の土器については多和田真淳氏が1956年版文化財要覧④に報告しているが、琉球における出土例は不顕著である。

第五類土器 中期を代表する口縁部の肥厚した甕形土器群で、第七図(図版面XIV)にまとめた四種に分たれる。

- A 肥厚部の断面が花鉢状を呈し、外部有段土器とも呼ばれ、多和田真淳氏によつてカヤウチバンタ式土器⑤と命名されたもので、同図1-6がこれ

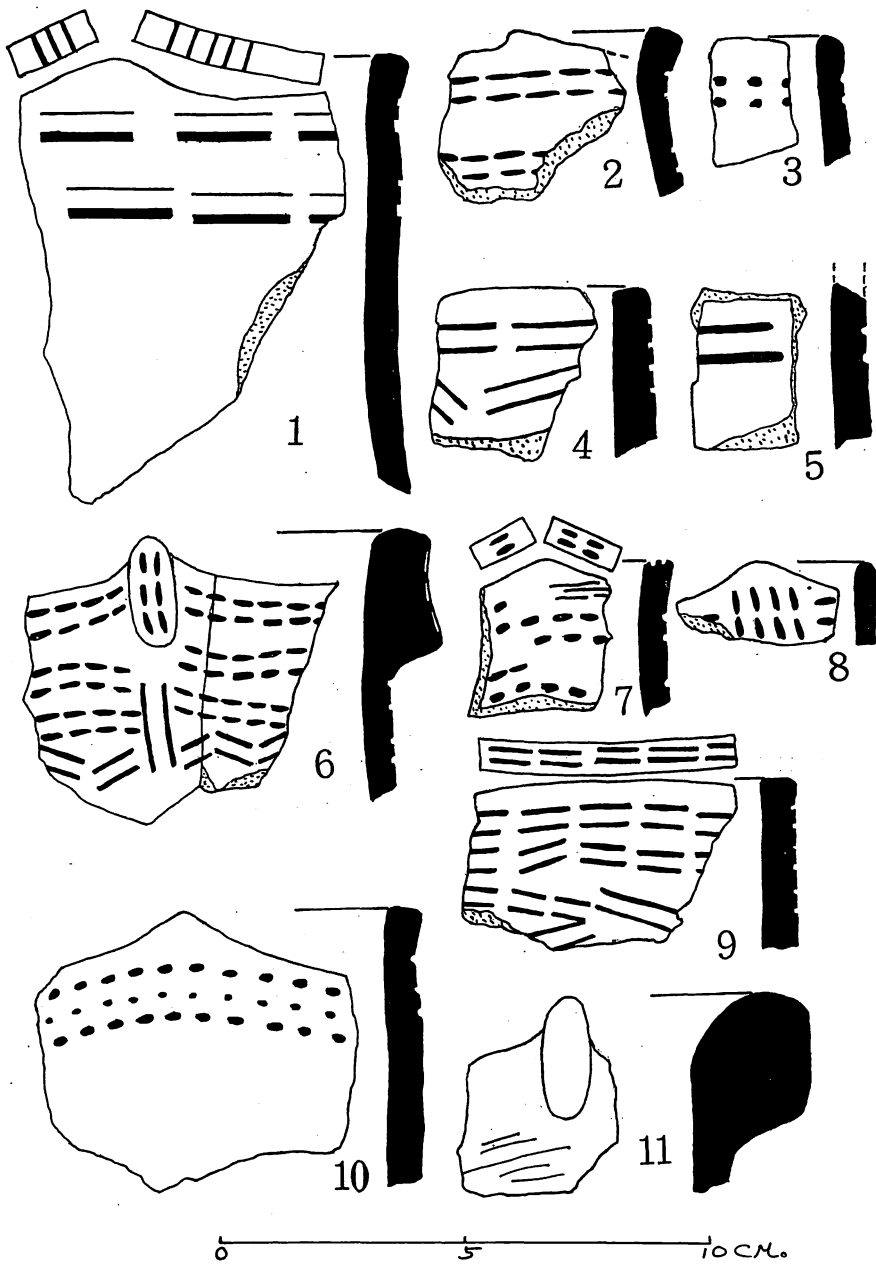


Fig. 4 Sherds of Kusato-baru site

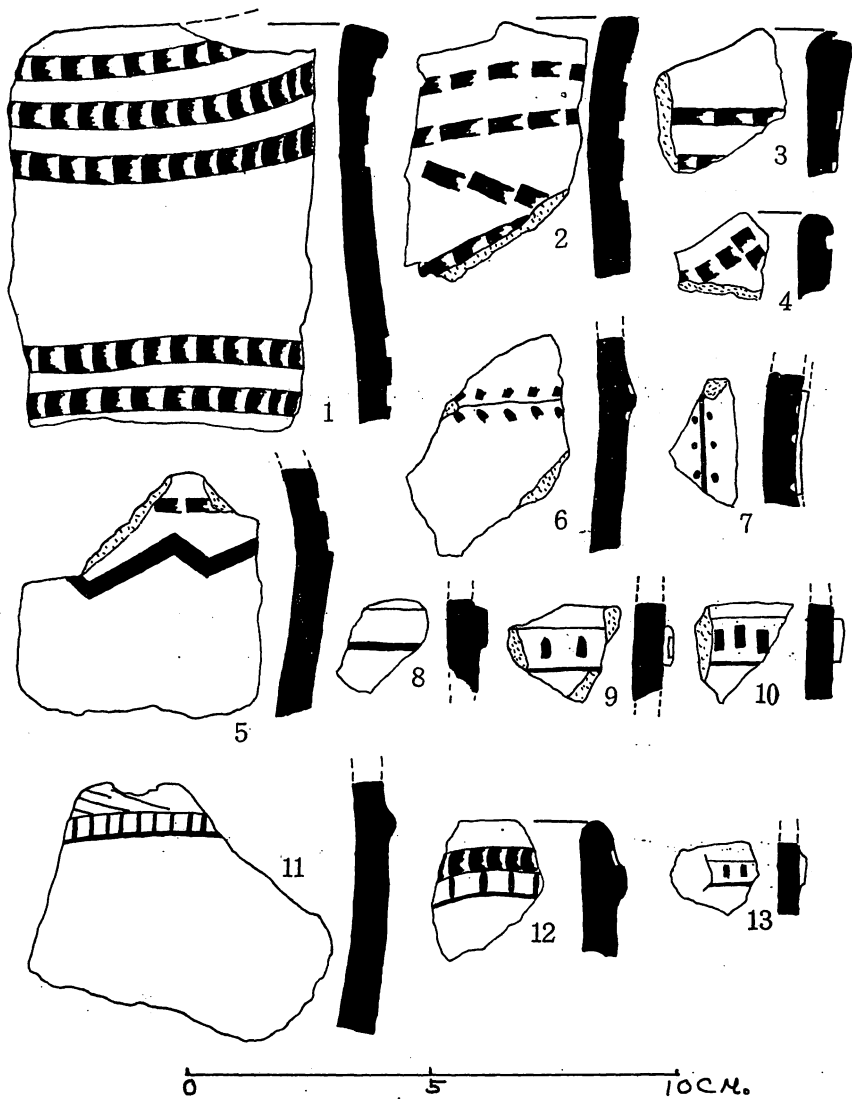


Fig. 5 Sherds of Kusato-baru site

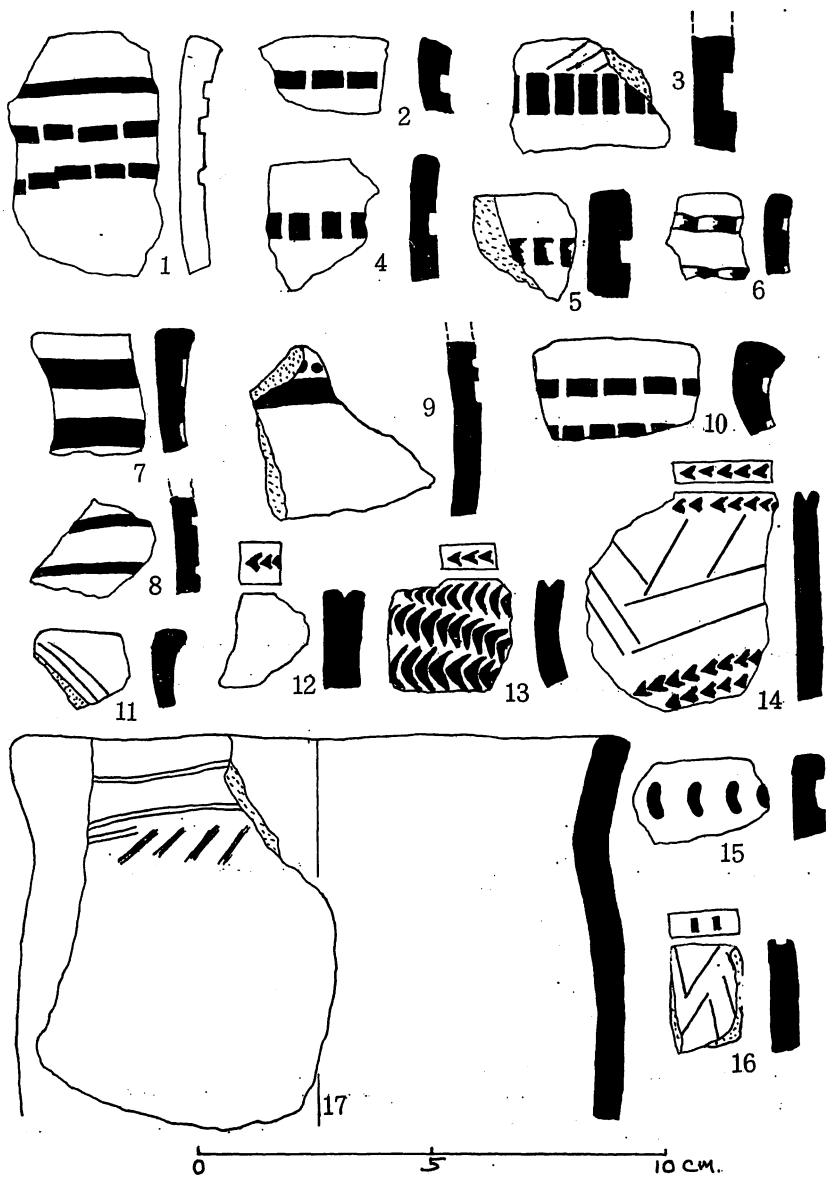
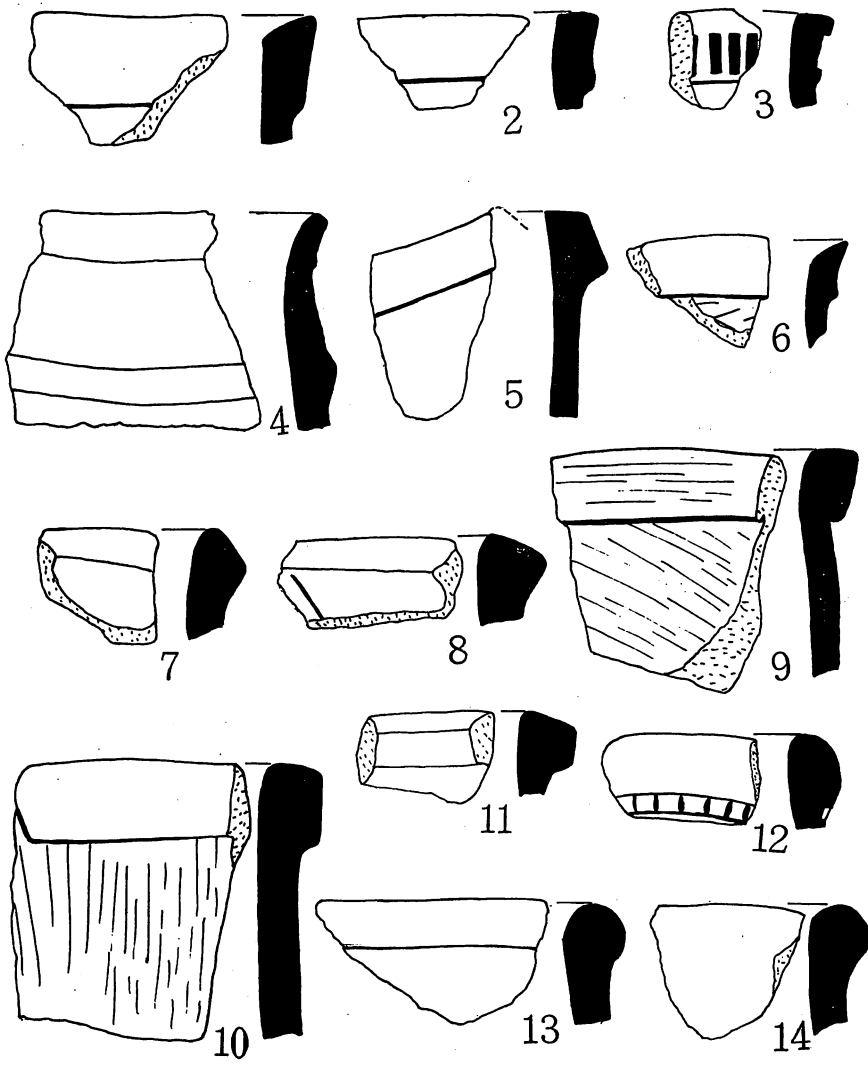


Fig. 6 Sherds of Kusato-baru site



0 5 10 CM

Fig. 7 Sherds of Kusato-baru site

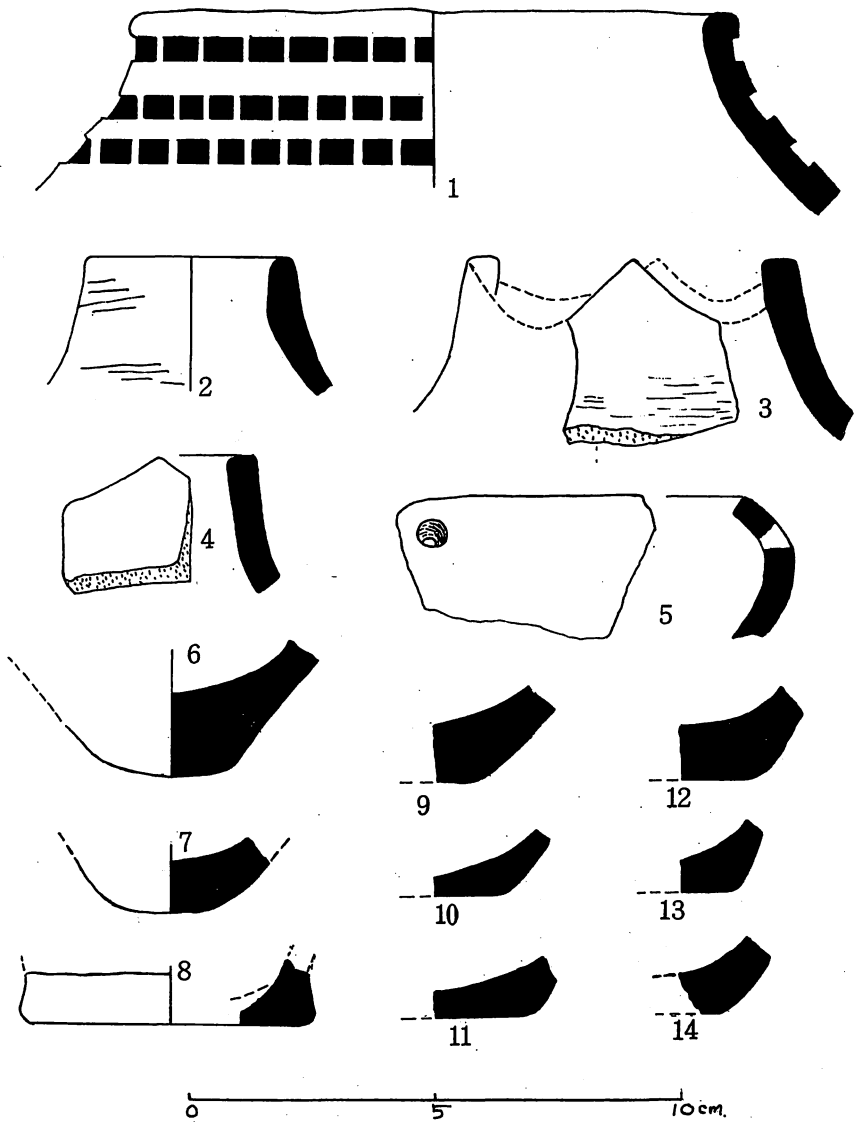


Fig. 8 Sherds of Kusato-baru site

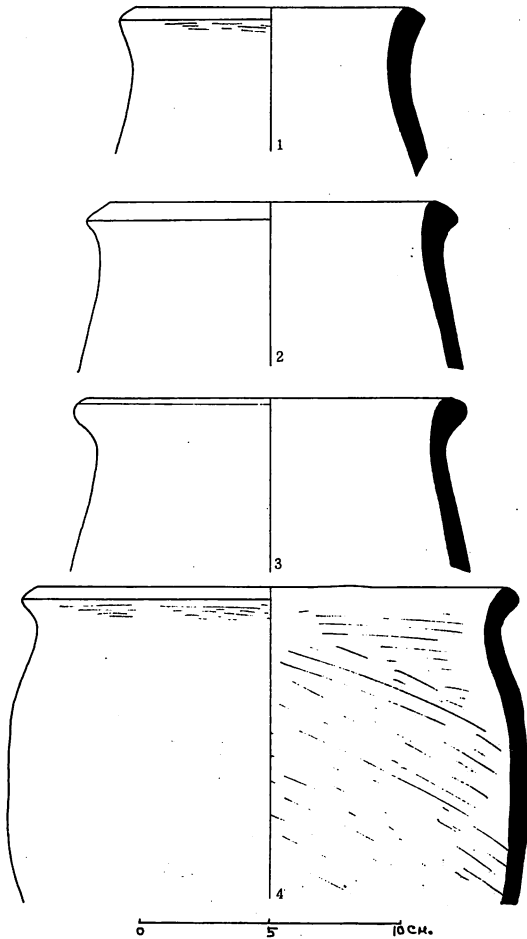


Fig. 9. Vessels of Kusato-baru site

である。1.2は口縁部の肥厚以外文様はなく、3は肥厚部に刻文を有し、4は胴上部で凸帯を横走させ、5は山形突起口縁を作り、6は肥厚部直下に細線を斜行させる。編年的には有文のもの程古いが、従来の報告で見ると前述第一類土器の文様形式を採用した例はなく、すべて第三類土器文様の範疇内にある。

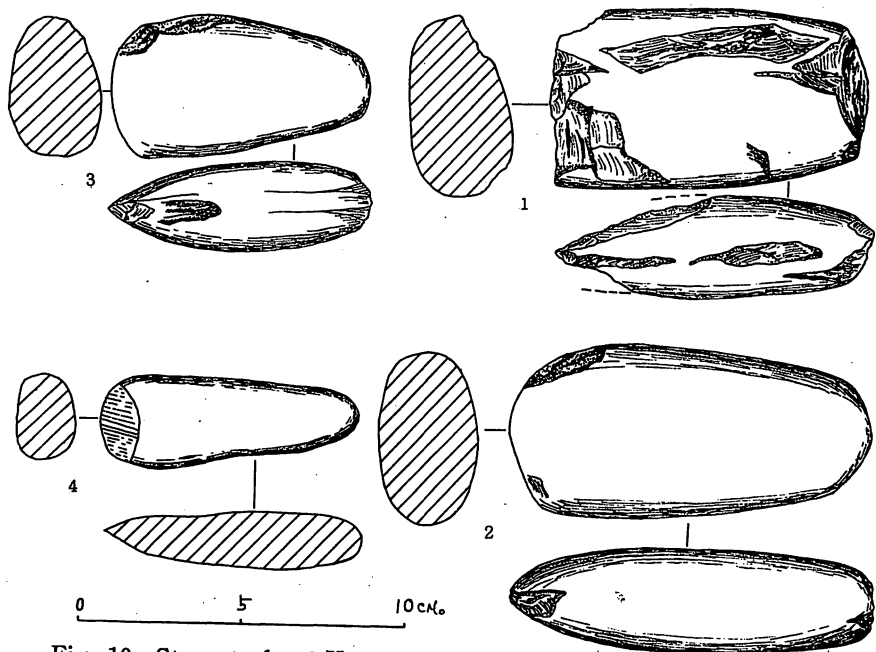


Fig. 10 Stone tools of Kusato-baru

- B 口縁断面が三角状を呈する甕形土器で、同図7、8に示したものである。8には沈線文の一部が残存しているが、この種口縁土器は奄美大島の宇宿貝塚⑥でもかなり検出され、琉球では多和田真淳氏が宇座浜式⑦として報告されたものである。本貝塚での採集は地表採集も合わせて三例である。
- C 口縁断面が四角状を呈する甕形土器群で、同図9.10.11が典型的な例である。採集品は5個であるが、本期におけるこの土器の性格は不明である。
- D 口縁断面において肥厚部が円味を帯びたもの（同図12-14）。検出された破片は15個。第二層上部で比較的集中して発見された。このタイプもC型と同じくその性格については今のところ不明である。

上記四種の他口縁部が胴部より若干厚く結果として上記口縁形式に近い形状をとる破片が四例、第二層上部で発見された。

第六類土器 無文の甕形土器（第9図1.4:図版 XIV B 5.9）で、24個発見された。類例遺蹟中では上記の数字は比較的多い方に属する。出土状況を層序との関連で見ると、最下層で5個、他は第二層中位上部での出土である。

土器底部は三種検出された。特に興味をひかれるのは Fig. 6-8 に示した三例で、6.7 は尖底である。6 は地表採集、7 は最上層攪乱部の出土で、いずれも石英の粗粒を多量含有する。これまでの報告例で見ると第五類土器のうちB と関係する底部かと考えられる。同図 8 は後期貝塚に頻出する底部直上が若干くびれる平底の形式に近いが、くびれ方が浅い。焼成度でいえば後期以前の範疇に属する。攪乱層直下三寸の地点での発見であるから中期の土器に属するものと考えられる。上記 3 個の底部は形式の上ではいずれも後期に頻出するタイプであるが、焼成の度合ではそれ以前に属する。本貝塚ではいずれも上層での出土であるから、後期の底部形式の発現が中期にあることを証する資料と考えられるのである。他は前・中期の典型的平底（同図 9-14）で検出数は24個である。

テンパー本貝塚出土の土器胎土に混入されている物質は普通細砂粒及び石英碎片である。これは上記各種土器を通じてかなり混入されている。しか

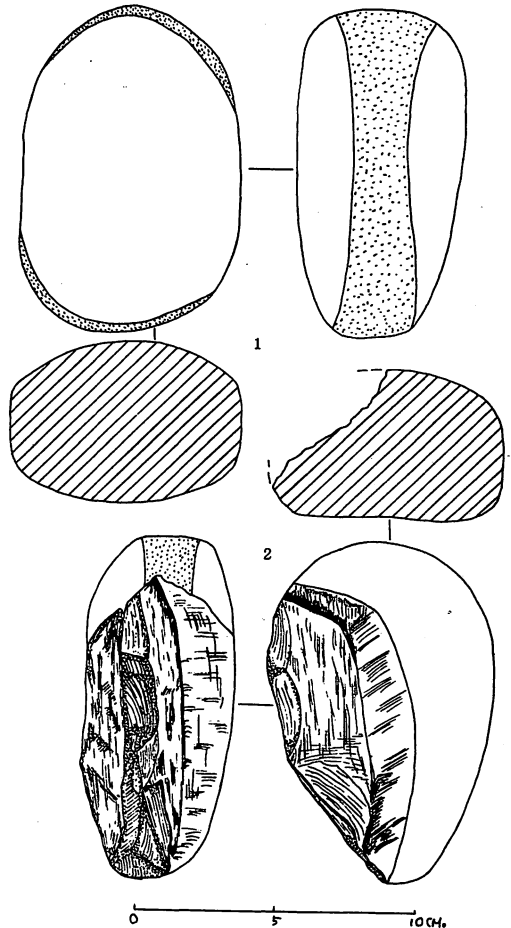


Fig. 11 Stone tools of Kusato-baru

し今回の採集品中には金雲母を混入した破片が3個検出された。これは類例遺蹟出土の土器では珍らしく、これまで報告に接したことがない。この3個の破片は全然別個の土器に属し、うち1個は口縁部の肥厚(図版X WBg)した土器である。他の2個は無文の胴部破片でどの種の土器と関係するか不明であるが焼成の上でみると、上記標品と同時期の遺物と考えられる。

河川貞徳氏は宝島浜坂貝塚の土器について興味深いことを報告しておられる。即ち「……南島の様相の中に雲母を混じてつくるものが7%の割合をしめていることや焼成の良い土器の存在すること等、本土の影響とみられるものが、奄美大島などよりつよい」^⑧という事実である。ここで久里原の該土器と詳細に比較することはできないが、時期的にも近いように思われる。勿論、久里原の雲母を混ざる土器が本土の影響であるか否かについては今後の研究に俟たねばならないが、奄美諸島と同じく今後十分気をつける必要があろう。

遺構 ここに遺構として述べるものはその全貌を知り得たわけではない。本貝塚から多量の自然礫が検出されたことは既にふれたが、このことは一瞬奄美大島宇宿貝塚の遺構を想起させた。宇宿貝塚では第七層の円礫角層下の第八層で石組遺構が発見されたのである。本貝塚も状況が酷似しているところから十分注意しながら試掘を行ったところ第2・3図に見る如くピットの西南部第二層に方形の石炭岩を二重に積んだ部分が現われた。これはピット中央部で切断されているが、西南部へは未だ続いている模様である。下部は第三層に及んでいる。この遺構がどのような目的で以てつくられたかは今回の試掘では確め得なかつたが、恐らくは住居と関係するものではなからうか。これについては近い将来再度調査を行い明らかにしたいと考えている。

考察 既にふれたように本貝塚においては各種土器の層序による明確な前後関係は掴めなかつた。しかし他の類例遺蹟における出土状態によつてみると第一類土器が最も古く、第三類土器がそれに後続し、更に口縁部の肥厚化した第五類土器が現われる。この三タイプの土器は同一貝塚に出土することが多い。第二類土器は型態的には第一類と第三類土器の中間形式をとるもので時間上の位置は明瞭でないが、編年的にも両者の中間に位するものではないかと考える。凸帯を貼付した第四類土器はかなり古い時期まで逆上るが、各時期を通じ量的には僅少で、しかも文様の上では各期の影響を強く受けている。第五類土器が第三類土器に後続することは既述の通りであるが、その中では口縁断面が花鉢状を呈する外部有段土器が古く、次いで断面三角状の土器群が現われるが、四角状及び丸形状のものについては不明である。

以上各種土器の前後関係を類例遺蹟の出土例によつて示したが、本貝

塚における層序関係が明確さを欠くにしても、第1表に表示した出土状態によつてある程度推移の傾向は窺えると思う。

さて本貝塚の上限であるが、第一類土器の特徴によつて知念村熱田原貝塚前の時期に比定することができよう。下限は不明であるが、器形の上で後期土器底部に類似する3個の底部の出土によつて中期もかなりの時期まで下るものとするのである。

尚、土器胎土に混入された金雲母については琉球政府経済局工鉱課長朝武士靖雄氏に御同定頂いた。ここに厚くお礼を申し上げたい。

- 注 1 国分直一 河口貞徳 } 「奄美大島の先史時代」日本学術振興会 1959
曾野寿彦 野口義磨 }
原口正二
- 2 嘉手納貝塚発掘以前、池原和夫氏によつて採集された遺物が首里博物館に展示されているが、展示物中に1例同種破片がある。
- 3 筆者発掘の貝塚で未発表であるが、同種口縁破片が少量検出された。
- 4 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」 文化財要覧
1956、琉球政府文化財保護委員会
- 5 多和田真淳 前掲書
- 6 国分直一 河口貞徳 } 前掲書
曾野寿彦 野口義磨 }
原口正二
- 7 多和田真淳 前掲書
- 8 河口貞徳 “宝島浜坂貝塚” 鹿児島 史学第10号
鹿児島県高等学校歴史部会

II 石蔵川貝塚

前泊から田名に通ずる村道を、田名を経て更に東に進むと石蔵川に達する。石蔵川は後岳に源を發し東流して太平洋に注ぐ小川で、どちらかといえば溝といった感じの川である。早魃時にはときに枯れることもある。この川手前の畑地が貝塚であるが、今は湮滅してしまつて貝殻や土器片が僅かながら散布しているに過ぎない。

上記村道は貝塚を南北に二分する。道路南部は砂丘地で百米ばかりで海岸に達し、同北部は同砂丘が古生層山麓に接する部分で、この道路をおおよその境として土器が異なる。道路以南つまり海岸寄りでは後期の土器片が散在し、同以北ではそれより古い時期の土器片が得られる。後者は特に砂丘後端部に

集中している。しかし土器片は前述の久里原同様、古生層の地域には及んでいない。第十二図は本貝塚採集の土器をまとめたものであるが、保存状態は至つて悪く、破片はすべて瑣細で辛じて特徴を認め得る程のものばかりである。

同図1-5は道路南部での採集である。採集総数90個のうち無文口縁破片4個、底部破片5個、同図1に見るような縦形の凸帯を貼付した胴部破片1個で、他は無文の胴部破片である。いずれも焼成良好の後期破片である。

同図6-8は古生層山麓部に隣接する砂丘地の採集で、焼成度は低く脆弱である。採集総数198個。今これを久里原土器の基準によつて分類すると第一類土器に属する破片が6個(6、7、8)、第三類土器に属する破片が5個、第五類土器中、口縁部が三角状を呈する破片が2個、同じく丸型の肥厚を示すものが1個、無文甕形口縁片が12個、底部破片が3個、胴部破片169個となる。文様特徴の判明する土器片は以上のように僅少であるが、時期的には大体久里原に一致すると思われる。本貝塚では骨器、貝器、石器は採集するに至らなかつた。尚、遺物は石蔵川以東には及んでいないようである。

Ⅲ 東ガジナ原貝塚

石蔵川に至る村道を更に東に進み、1958年琉球政府文化財保護委員会によつて天然記念物に指定された念頭平松を過ぎて五、六百米ばかり行くと旧部落跡東ガジナ原に達する。この一帯も砂丘地で今は全く畑地に変じているがまばらな生垣が僅かながら昔をしのばせる。この砂丘地に土器片が散在しているが、保存状態は石蔵より悪く、採集は更に困難である。遺物は道路以南の地に多いが、道路以北でも若干採集できる。筆者の調査時は道路以北の地は甘蔗畑になつていて採集は困難であつた。それで、採集は主として道路以南の地で行つた。

採集土器片は84個、すべて後期貝塚に出現するタイプである。採集品中主要な破片を第十三図に示したが、84個のうち、無文口縁破片が3個凸帯を貼付した破片が4個、底部が2個で他はすべて無文の胴部破片である。凸帯は縦に付したものと横に付したものとが見受けられるが、凸帯部あるいは凸帯上方または下方に施文した破片は一例もない。器形の窺える口縁破片でみると壺形はなくすべて甕形土器に属する。

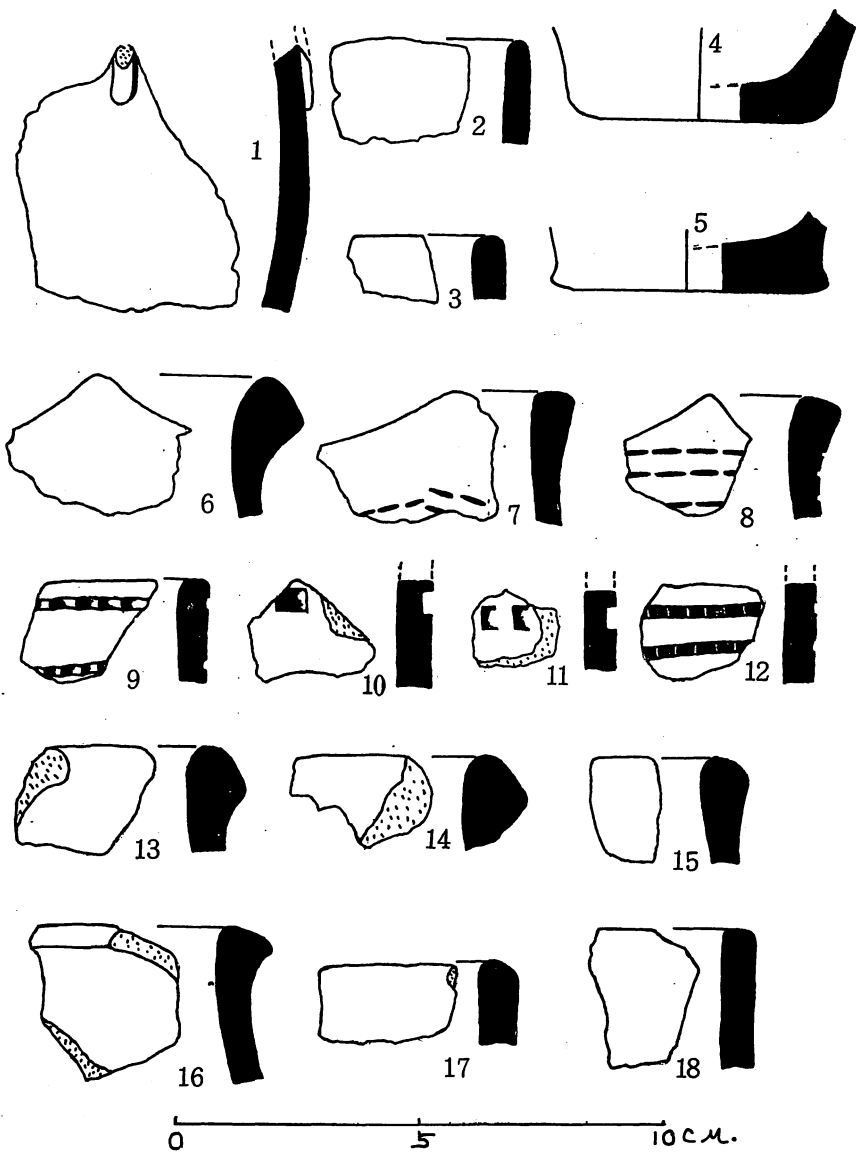
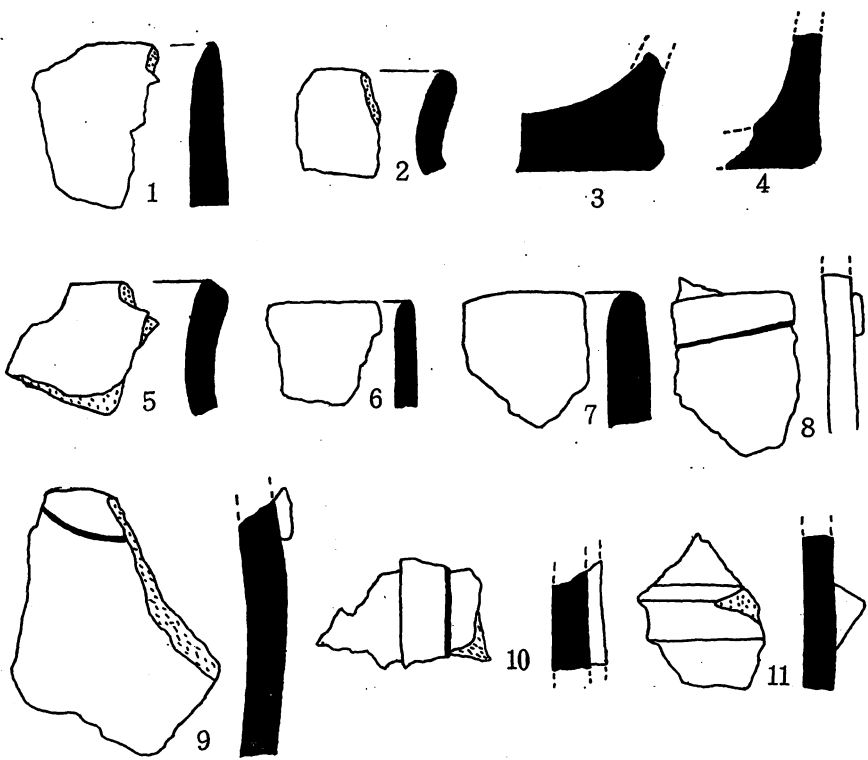


Fig. 12 Sherds of Ishikura site



0 5 10 cm.

Fig. 13 Sherds of Hija Gajina - baru

IV 上里遺跡

我喜屋部落後方、腰岳に発する一丘陵の末端部に上里と呼ばれる緩傾斜の地域がある。伝説によれば現部落の前身の地で、琉球王第一尚氏尚巴志の祖父屋藏大主の頃、北のウフンダという地より移り住んだ場所だといわれる。遺跡地のやや上方には近隣の山々を司る神々と火神を合祀した片隈神社がある。

遺跡は現在畑地となつているが、至つて狭少で遺物の保存状態も甚だ悪い。現在陶磁片が僅かながら採集できるが、土器片や石器類は得られなかつた。PLATE XVII B に示したものが本遺跡採集の陶磁片で、多和田真淳氏はこれを宋一明初と同定された。

× × × × × × ×

伊平屋で陶磁類を産出する遺蹟は今のところ上里だけに限られるが、我喜屋より古いといわれる田名やその他にも同種遺蹟が存するものと思われる。また、我喜屋、田名両部落周辺では現在貝塚は知られていないが、それは田名では砂丘地の大部分が水田に変えられ、我喜屋でも同じく砂丘地の一部は現居住地、他は水田として耕作されたため湮滅してしまった可能性が強い。実物は戦禍のために現存しないが、我喜屋部落では以前石斧を採集したことが伝えられているし、次回には島尻も含めた本島中南部に力を入れたいと考えている。なお、同島東端部に「天の岩屋」と呼ばれる玻璃質珪岩の大洞窟があり、試掘を予定していたが、今回は時間の都合で放棄せざるを得なかった。

B 野 甫 島

野甫島は伊平屋島の西南海上に位し、周囲約四軒、平坦な隆起珊瑚礁の島で、主島の伊平屋が外面芋状を呈するに対し、野甫は円形に近い島である。集落は野甫一ヶ所で島の東南部にあり、戸数七十戸前後の純農村である。しかし耕地に乏しく、また元来水の少い島であるため水田もない。しかし若干の人々は主島の伊平屋島に水田をもち耕作にはくり舟で往復しているようである。

ここでは四時間調査を行い、次の諸遺蹟を確認したが、いずれも著しく破壊され発掘の余地はない。以下本島諸遺蹟及び採集の遺物について略述したい。

I 野 甫 貝 塚

現部落内にあり、船着場から部落中央部の公民館にかけて土器片や貝殻が散在している。遺物は公民館後方へは及んでいないようである。海岸線では船着場一帯が主で、前島御嶽境内まで続いている。遺物の散布状態は貧弱で僅かに土器片19個を採集しただけである。

第十五図B1-4に示した口縁破片が本部落の採集で、1-3は後期に出現する焼成のいい薄手の甕形土器口縁片、4は断面が三角形を呈する口縁片で器色は赤褐色、焼成も比較的良好である。胴部破片はほとんど後期土器のものであるが、中には3個だけ後期以前に見られる脆弱な破片が採集された。この3個は前記断面が三角形を呈する口縁片とともに、本貝塚の上限を示唆する資料である。他に底部破片が1個あるが、形状は察し得ない。

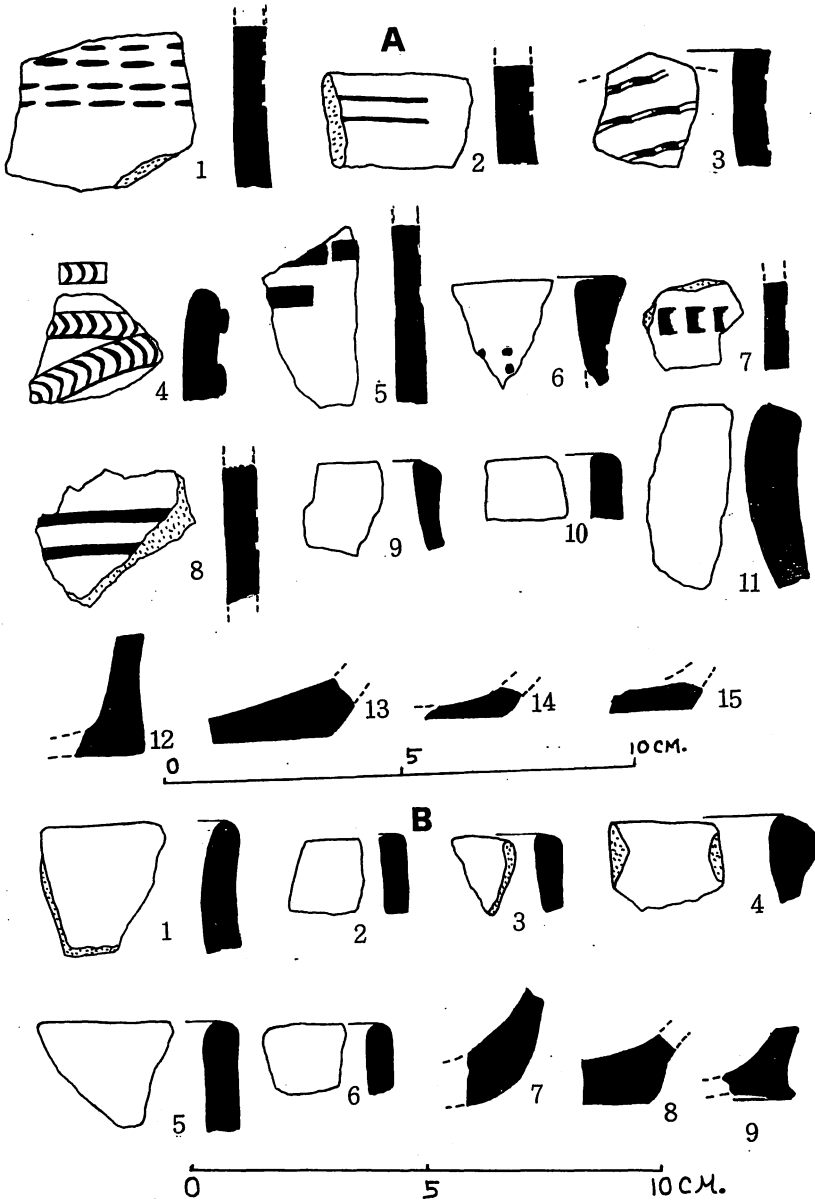


Fig. 14 { A • Sherds of Maetake site
 B • Sherds of Gusanna site

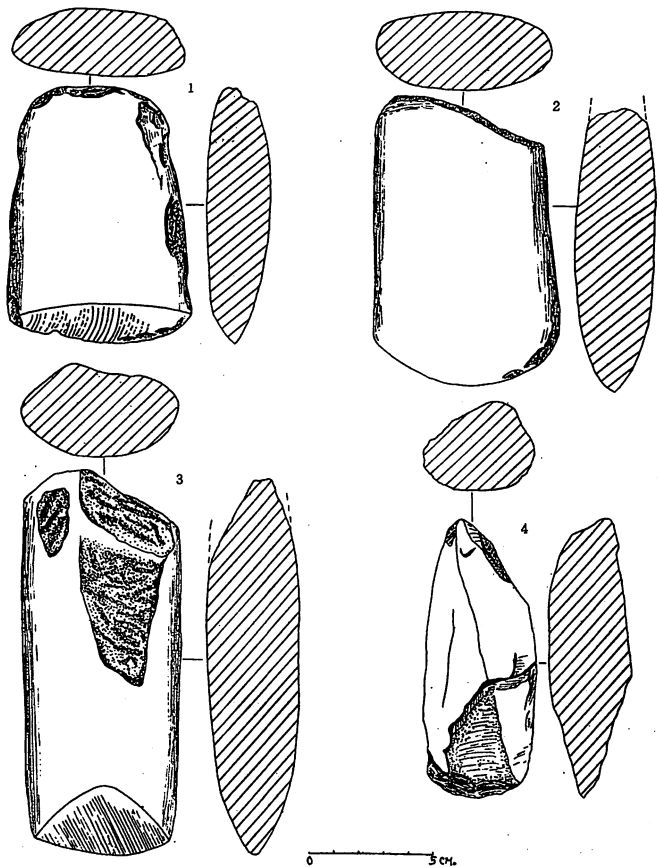


Fig. 15 Stone axes from Noho

II グーサンナ森遺蹟

野甫西北部の台地に形成され、伝説によれば野甫部落の前身地であり、また野甫の発祥の地ともいわれる。台地上は石灰岩の露出部を除きほとんど耕地であるが、遺物は台地の東南部(PLATE)から同斜面に比較的豊富である。ここは畑地縁端部でアダンが密生しており、耕作からの被害が少かつたため比較的保存されたのだろう。しかし全体的には矢張り遺物の出土状態は悪い。

本遺蹟で206個の土器片を採集したが、殆んど1~2 廻前後の小破片である。これをを所属部位で類別すると口縁破片4個、底部破片11個、他の191個は胴部破片である。口縁部の比較的大きい破片を第十五図 B (5.6) に示した。底部の1個は丸底(同図 7)、他は平底であるが、2個を除き欠損が著しいため形状は窺い得ない。同図 8.9 に示したのがこの二個である。土器は全体的に黄褐色の色調を有し、焼成は比較的良好である。器壁は薄く5 耗前後を普通とす。胎土には砂粒が混入されている。破片が瑣細なため器形は窺い得ない。

グーサンナ森に対峙してテルチャマと呼ばれる小丘がある。その西端部にある小型製糖工場近隣でも若干土器片が得られるが、焼成、胎土、色調等グーサンナ森のそれと一致する。ここは別個の遺蹟というよりむしろグーサンナ森遺蹟の一部でその周縁部にあたると思われる。

Ⅲ 前 島 原 貝 塚

野甫小中学校の西方 200 米ばかりの畑地内にあり、一帯は俗に前島原と呼ばれている。遺物は道路南北両側の畑地で採集できるが、散布の範囲は狭小である。

採集遺物は土器片 91 個(第十五図 A)で、文様形式はほとんど前期に属する。今これを久里原の基準でみると、第一類土器に属する破片が 3 個(同図 1.2.6)、第二類土器が1個(同図3)、第三類土器が4個(5.7.8)、第四類土器が1個(4)、無文土器口縁片が 3 個、底部片 7 個、及び胴部破片が 72 個である。底部はすべて平底であるが、底部から胴部への移行形状で 15 図 A12 と同 13-15 の二種に分つことができる。同12は久里原出土の底部破片(PLATE)と同一である。

石器 筆者は野甫島で石器を採集するに至らなかつたが、野甫小中校に同島での発見といわれる石斧が 4 個あつたので拝借した。第十六図に示した 4 個で、1-3は磨製、4は打製の石斧である。横断面で見ると 1-3 は扁円形、4 は不定形ながら三角形に近い。後者は偶然に成形されたものであつて、先島に見られる屋根型状石斧と系統関係を考えるのは無理のように思われる。

お わ り に

以上伊平屋、野甫両島における採集遺物について記述したが、今これによつて諸遺蹟の編年の位置付けを行えば大体次の如くなると思う。

遺 時 代 区 分		久里原		石 蔵		東ガジナ原	上 里	前 島 原	野 甫	グーサンナ森
		東	西	北	南					
前 期	前									
	後									
中 期										
後 期										
原 史										

久里原、石蔵両貝塚の場合、種々の点からみて地理的移動（例えば砂丘後方部から前方部への）はあつたにせよ、時間の上では継続的に占居されたのではないかと考えるが、琉球における後期土器の編年がまだ不完全であるので、一応表示の形で保留しておきたい。また、グーサンナ森出土の薄手でやや堅固な黄褐色の土器片については、中期の初頭には見受けられないからそれ以後、特に中期末あたりと考えられるが、現在その位置について論じ得ないのは残念である。

とに角、上表は兩年度の断片的な資料によつて作成されたため、各遺蹟の上限、下限は甚だ大雑把であり、今後の資料によつて補正して行きたいと思う。